

産学官との連携

相手に9割以上を伝える「非言語コミュニケーション」の重要性から見える日本人の課題

科学の萌芽 12

宝塚大学東京メディア芸術学部教授／
劇作家・演出家

竹内 一郎先生



竹内 一郎 先生のプロフィール

【学 歴】

1981年 3月 横浜国立大学 教育学部心理科 卒業
2005年 3月 九州大学で博士(比較社会文化)学位取得。(論文博士)

【職 歴】

1981年 4月 (有)オフィスワンダーランド所属、劇作家、演出家、漫画原作者として活動
1997年 4月 九州大谷短期大学 専任講師
(国文学科演劇放送コース、現表現学科演劇放送コース)
1999年 4月 同上 助教授
2001年 4月 同上 退職
2001年 4月 同上 非常勤講師(「劇画論」「戯曲論」担当)
2003年 4月 東京工芸大学芸術学部 非常勤講師(「メディア文化論」担当)
2007年 4月 専修大学ネットワーク情報学部
非常勤講師(「ネットワーク特論」担当)

【所属学会・活動】

2001年 4月 日本マンガ学会
1991年11月 文化庁・芸術家在外研修員、フィリピン伝統芸能を調査・研究
2007年 4月 日本演劇協会会員
2008年 4月 日本文芸家協会会員

【受 賞】

1989年 3月 『戯曲・星に願いを』(五月書房)で、文化庁・舞台芸術創作奨励賞佳作受賞
2000年 6月 『哲也 雀聖と呼ばれた男』(講談社)で、講談社漫画賞を受賞
2006年12月 『手塚治虫＝ストーリーマンガの起源』(講談社)で、サントリー学芸賞(芸術・文学部門)を受賞

聞き手：

梅垣 喜通 日本科学機器協会 広報委員長
高橋 秀雄 “ ” 広報副委員長
夏目知佳子 “ ” 広報委員
岡田 康弘 “ ” 事務局長
(取材・撮影・編集協力：クリエイティブ・レイ(株) 安井久雄)



非言語コミュニケーションを
日本に広めたベストセラー
『人は見た目が9割』 著者

竹内先生が執筆された『人は見た目が9割』は、116万部を販売したベストセラーとなり「非言語コミュニケーション」を日本に広められました。さらに、活動分野が漫画・演劇関連・コミュニケーション論など広範囲です。その研究や活動について教えてください。

竹内 学問としては「非言語コミュニケーション」を専門に、研究および普及活動に取り組んできました。アメリカでは、“ノンバーバル・コミュニケーション”と言われているもので、1960年代から研究が始まった領域です。九州大谷短期大学の教壇に立つようになった時に、新たに科目を立ち上げました。

大学卒業後、演劇界で劇作家・演出家として活動していました。

一方で、漫画の原作も手がけました。週刊少年マガジンで連載した『哲也―雀聖と呼ばれた男』は第24回講談社漫画賞少年部門を受賞しました。

せっかく漫画の現場を持ったので、漫画の研究や評論も行いました。『手塚治虫＝ストーリーマンガの起源』という研究で、サントリー学芸賞をいただきました。

物語作りの基本のようなものが、自分の中で積み重なって、やがてテレビドラマ、ラジオドラマなども書くようになっていきました。いくつかの幸運が重なって、自分の仕事が学際的になっていきました。

産学官との連携

専門分野の「非言語コミュニケーション」について詳しく伺います。竹内先生がこの科目を新たに作られた経緯や動機などを教えてください。

竹内 私は大学時代に心理学を専攻しました。当時はノンバーバル・コミュニケーションではなく、「男女の性差心理学」を研究していました。アメリカの心理学者が、1960年代頃から“ノンバーバル・コミュニケーション”つまり『非言語コミュニケーション』というものを扱っているという事を知ってはいましたが、その時は深く掘り下げることはありませんでした。

学生時代は、心理学の研究者になるより作家になりたいと考えていました。特に好きになったのが、シェイクスピアです。彼の作品に触れて戯曲を書く魅力を感じ、演劇の方での活動を始め、卒業後も続けていました。

当時の日本は、演劇の文化が今以上に根付いていなかったのも、生活は貧乏でした。生活費を補うためにも、漫画の原作や、テレビドラマ、ラジオドラマにもフィールドを拡げていったのです。

40歳になった時に、九州大谷短期大学で教えないか、という依頼がありました。ところが、私には、教える自信がありませんでした。

母校である横浜国立大学の教育学部の学部長に相談に行きました。

すると先生から「君は心理学の基礎の上に、演劇と漫画というノンバーバルな経験を持っている。ノンバーバル・コミュニケーションを教えてみてはどうか」と提案されました。

大学からの依頼は、演劇を教えて欲しいというものでしたが、私は相談した先生の見識に敬意を抱いてもいたので、九州大谷短期大学で、日本で最初の非言語コミュニケーションの講座を開くことになりました。1996年4月のことです。

そもそも「非言語コミュニケーション」とは、どのようなものなのでしょう。

竹内 その名の通り、言葉以外の情報すべてのことです。“I love you”という台詞が、人の振る舞いによって「実は嫌いだ」という意味を持つこともあれば、逆に“I hate you (あなたが嫌い)”という台詞が、「愛している」という意味になることがあります。言語情報が、正しく伝わらないことがあります。表情や言い方、態度などが、言葉の意味を打ち消してしまうのです。

落語で、真打の名人が非常に面白く語る古典落語を、未熟な前座の落語家が喋ると全然面白くないといったこともあります。非言語情報の差ですね。

ざっとまとめると、非言語コミュニケーションとは、言葉以外の膨大な情報、ということになります。

非言語コミュニケーションを形成する要素には、具体的にどのようなものがあるのでしょうか。

竹内 非常に多岐にわたります。また、国、民族、宗教などの背景によっても、要素が増えることを前提に申し上げます。

『科学の萌芽』とは

各分野で活躍する次世代の科学技術の担い手にご登壇いただき、成功までの軌跡や知られざるエピソードなど、サイエンスの“今”と“未来”が見えてくる企画です。

取材日：2022年7月22日
日本科学機器協会会議室

産学官との連携

動物行動学者のデズモンド・モリスは『マンウォッチング』という著書で、人間の本心が現れる動作を7つあげています。信頼できる行動としている順番にいきますと、1番は緊張で汗をかく、動悸が激しくなるといった自律神経信号。2番目は貧乏ゆすりに代表される下肢信号、3番目は体幹（胴体）信号。これは肩がしぼんでいる時には自信がない、前のめりになっている時は興味が強い、といったようなことです。4番目は、イライラが微妙に指の動きに現れるような、見分けられない微妙な手の動き。

5番目は、その手の動きを他人が見分けられるほどに現れることを挙げています。6番目が表情、7番目がようやく言語です。このうち6番目までが非言語コミュニケーションを成す要素になると言えます。言葉が最も信頼できない情報ということになっています。というのも、言葉は脳の指示通りに嘘をつくから、信用できないのです。

他の例で、金山宣夫氏の『世界20カ国ノンバーバル事典』では、国で異なる数多くの非言語コミュニケーションの例が示されています。例えば、指をカギ型に立てると、日本では泥棒の意味、メキシコでは「カネ」の意味、中国では「九」の意味となります。

さらに「人差し指を口にあてる」は、ほとんどの国で「静かに」という意味が共通している、国際性が高いノンバーバル行動である、ということなどが説明されています。

また、相手が着ている服の印象、何色のどんな服を着ているかということもあり、その人が、前髪を垂らして

いるのか、上げているのかということもあります。また、会議などであれば、メインの話し手からどれくらい距離をとった席に着席したのかといったようなことも関わります。

私たち日本人を見て見ると、オーバーアクションが少ないことを含め、非言語コミュニケーションを含めて「伝えようとする人が少ない」という感じもあるのですが、いかがでしょうか。

竹内 それはいいところにお気づきですね。

日本独特のコミュニケーションについて、芳賀 綏氏は『日本人の表現心理』の中で、「語らぬ、わからせぬ、いたわる、ひかえる、修める、ささやかな、流れる、まかせる」という8つのことを挙げ、欧米とは異なる、非言語コミュニケーションの手法の発展形態の独自性に触れています。多くのことが述べられていますが、とても乱暴にまとめると「相手にわからせ、自分を通すのがヨーロッパ流、お互いに、語らずに、察するのが日本流」ということです。その文化的な土壌が背景にあるので、日本と欧米では非言語コミュニケーションも変わってくるわけです。

私なりの考察で、日本人は、ストレスを回避してエネルギーを使っていないように思います。例えば、アメリカに行くコミュニケーションすることに消耗し、疲れを感じるという方は多いのではないのでしょうか。そのように感じるのは、日本人が普段エネルギーを使っていないという裏付けだと思えます。

日本が一步前進するためには、「感じ方の違う人に理解してもらう」努力が必要なのではないのかなと、ビジネスや、多くの場面で感じます。

言葉が伝えているのは言語内容のわずか7%

コミュニケーションにおいて、“非言語”が非常に多くを占める、ということなのです。

竹内 アメリカの心理学者のアルバート・マレービアン博士は、人が他人から受け取る情報について、実験を行い数値化しました。その結果は、「顔の表情 55%」「声の質（高低）、大きさ、テンポ 38%」「話す言葉の内容 7%」というものでした。

この実験は、被験者に「好き」という言葉をイライラした声や怒った表情など、矛盾する情報を同時に伝えと、相手はどの情報が最も印象に残ったのか調べるという実験でした。1960年代の実験ですので、今の視点で見ると、結構粗い結論だとは思いますが、言葉が伝えているものは7%に過ぎず、残りの93%は言葉以外の要素だ、という結論となっています。

この実験結果が、『人は見た目が9割』という本のタイトルベースにもなりました。出版社の担当者が、この実験におけるボーカル（音声）情報とビジュアル情報を「見た目」と規定すると、「見た目が9割」ということになるということで、タイトルを発案していったわけです。元々のタイトルは『日本人のための非言語コミュニケーション入門』でしたが、こ

れでは売れないので代案を考えようとなりました。クレバーな担当者に助けられて、鮮やかなタイトルが生まれました。

日本で高まってきた非言語コミュニケーションの重要性

日本とアメリカをはじめとする海外では、非言語コミュニケーションの研究において、どのような差があるのでしょうか。

竹内 かつては色々な差がありましたが、日本でもかなり重要性は認識されるようになってきました。

そもそもの背景には、日本は日本語という単一言語（除く、アイヌ語）で、世界で稀に見るほど言語のプラットフォームが安定しているので、非言語コミュニケーションが盛んになりにくいということがありました。一方で、多様な人々が暮らすアメリカでは、英語を喋るだけで意思が通じるとは限りません。そういう中でノンバーバル情報が重要視される土壌があったわけです。

そういった状況を改善するためにも、微力ながら、非言語コミュニケーション学の分野を提案してきたわけですが、当初の風当たりはかなり厳しかったです。私の考えは「言葉以外の情報も重要だ」ということになりますが、文科省の国語部会は「言語こそがコミュニケーションの手段だと教えている」のに、言語は10%未満の情報しか伝えられないという主張に対しては批判的でした。

それが12年ほど前に、文科省検定教科書の中の一説に「非言語

産学官との連携

情報も重要なのだ」という、私の文章が記載されました。私の提案を国が認めてくれたことになります。

それは竹内先生がバイオニアとなって取り組んでこられた研究、活動の賜物に他なりません。先駆者としての苦労は、多かったように思いますが、いかがでしたか。

竹内 そもそも困ったことは、非言語コミュニケーションに関する本が日本には一冊ありませんでした。アメリカの研究者による古典的な本の翻訳書が一冊あるのみ。古すぎるし、当然日本の実情に即していないので、活用するには難しいものでした。

そこで、漫画や演劇の色々な例え話を沢山取り入れ、社会学的、心理学的、そして文化人類学的な知見をノンジャンルで参考にし、その資料を基に講義ノートを作り改善していきました。一例をあげると、ある台詞を「太った俳優がニコニコして言っている場合は良い印象を受ける、だが同じ言葉をギスギスした雰囲気、の痩せた俳優が言った場合は?」といったような授業の展開の仕方でした。そういう形で講義ノートを大体8年間かけて作っていき、それが『人は見た目が9割』になっていきました。

非言語コミュニケーションの浸透の一方で広まった誤解

書籍『人は見た目が9割』が発表された後、周囲の反応はどのようなものでしたか。

竹内 「見た目」という言葉が一人歩きし、私も最初は困りました。美男美女が得だという皮相な考え方が流布しました。“見た目第一主義”というルッキズムという考えと結びついて、様々な反応、反響がありました。その多くは、本の中身を読んでおらず、非言語コミュニケーションについての本であるということに触れていない人から起きたものでした。

誤解されたことで、意義があったこともあります。その1つに、高校の関係者の方々からの問い合わせで、「高校生が就職面接を受けるのに適した身なりや髪型をしてくれないので、変えたい」といった相談がありました。先生方は日頃「人を見た目で判断してはならない」という教育をしているので、例えば髪を染めて就職面接に行く生徒にうまく対応出来ない。でも「見た目が9割と言っているあなたが話せば分かってくれるだろう」ということでした。かくして高校に出向いて、見た目で判断してはいけないという倫理観と、見た目が印象を左右する社会人としてのマナーとの違いを、説いて回ることになりました。

さらには企業の営業マンへのレクチャーという依頼も舞い込むようになりました。「言葉で商品内容を伝える前に、見た目の非言語情報が大切だということを説いて欲しい」ということで、不動産、宝飾品、銀行関係の債権など、色々な営業を扱う企業に出向き、話をしました。そうしていくことで、私自身コミュニケーションの知見も広がりました。深めたいという興味も湧き、アンケートを行うなどの調査などにも取り組み、そうした

産学官との連携

結果や考察をまとめて、非言語コミュニケーションをテーマにした論文を立て続けに発表しました。

日本の技術者は、さらにコミュニケーション力を

この機関誌の読者に多い、科学機器メーカーに講演に行かれたようなことはございますか。

竹内 あります。海外にも製品の需要が高い、メーカーさんでした。なぜ依頼があったかというと、経営者の方が、「技術力はあるから、社員は作っていればモノは売れると安心していて危機感なく、コミュニケーションが乏しい」といった事を社員に感じてのことだったのです。その経営者の方は、同業種のアメリカの生産現場を視察し、ものすごく技術者同士が喋り、日常的に情報交換をしていた姿を見ていた経験がありました。そんなことで、私が依頼された企業に行き、そしてその他の多くの企業も訪ねました。

全体的に「日本の技術者はやはりコミュニケーション不足かな」という印象を私は抱きます。技術を磨いてきた方は、ご自分だけでやりたいという思いがあるのかもしれませんが、その結果、会社全体がおとなしく、内向的と感じる事が非常に多くありました。

コミュニケーションをした結果、異なるジャンルの方から大いにヒントや発想を得た例は、私も経験しましたし、良く耳にしています。例えば、iPS細胞の研究で有名な山中伸弥教授は、当初はiPS細胞の話を医学部

の研究者に否定されていたようです。植物学者の人に話したところ“植物の細胞は当たり前に行っていることだ”と聞いて大いに励まされ、研究の大きな成果に繋がっていたと言えます。

このように異分野との交流、他者とのコミュニケーションというのは、非常に大切だと思います。

見た目の美は、平均値？

一連の体験談をうかがっても、研究者でありながら、好奇心、行動力、見識の広範さに敬服いたします。

竹内 想像していなかったところでは、美容整形の学界で基調講演をやりました。「見た目がよくなると、自信がついてくる」ことを美容整形の医師は知っていたのです。そうした学会に参加して知ったのが、日本の美容整形の技術力が世界一だそうです。海外のセレブが、大金を使って日本で美容整形を受けるために来日しているのです。

ちなみに、美容整形を受ける方が望むのは“平均値に近づける”ことだそうです。美は時代や場所によって違い、絶対的な定義がないのでそうなるということでした。だから、きれいになりたいという事を追求すると、顔や見た目が似てきてしまうということが起こるようです。

リモートやマスク顔でのコミュニケーション注意点

コミュニケーションが大切であることを思いながらも、コロナ禍で人同

士が会う機会は激減しました。それが生む問題などをどうお考えでしょうか。

竹内 若い世代の方々の事を考えると、10代や20代前半など、若い頃に社会性を獲得する機会を失ったことの影響は非常に大きいと思います。

人を惹きつけコミュニケーションを成立させる力は、子供の頃からの対人関係や対面的なコミュニケーションの中で培われていくものであり、また、話してきたように、直接会った時は、自覚している以上に情報量を交換しあっているので、ネットの言葉だけが情報だと思ってしまう状況は、好ましくないと思います。

そして教育、ビジネス、関わらずオンラインのリモートが増えましたが、この場では、対面でのコミュニケーションと違い「あ・うん」の呼吸が伝わらなくなりますので、明確に意思を表現することが必要になります。また、チャットやメールの書き言葉での伝達が多くなりますが、そこには、対面で話している時には伝わっている「あ・うん」の呼吸がなくなってしまう。運が悪いと、逆の意味に捉えられ、誤解を生んでしまうこともあります。ですので、書き言葉であるという自覚を持つことが非常に求められると思います。

また、コロナ禍の今、“マスク時代”となっているのですが、人が感情を表現する時に役目を担う部位は、顔の中では、眉、目、口の3つです。マスクをすると口は隠れてしまっているので、気持ちを伝えることも読み取ることも難しくなっているのです。

そうすると、マスク着用の会議で、同意あるいは反対の意思を示すときは、目で、暗に主張することも必要だったりするのではないのでしょうか。

竹内 実は、目元と眉はとても雄弁です。その実例が、実はミッキーマウスです。アニメにおける表情の世界的なスタンダードを発明したのはウォルト・ディズニーだと言えます。それが、彼がミッキーマウスに眉毛をつけたことが始まりなのです。彼は眉毛によって動物の感情を表現できることに気付いたのです。

非常に興味深いことばかりでした。最後に、演出や創作は大変想像力を求められると思います。想像力を高めるにはどんなことが大切だとお考えでしょうか。

竹内 やはり普段の生活では得られないものに触れる、単純ですが、海外へ赴くようなことが、大切だと思います。自分の知らない文化や価値観に触れるといった外的刺激がないと想像力を高めるというのは難しいと思います。

産学官との連携



本年5月26日(木)東京・上野精養軒にて行われた(一社)東京科学機器協会第77回通常総会にて講演された竹内一郎先生

ロンドンのミュージカルを観に行くのも良いし、イタリアのオペラを聴いたり、アメリカのラスベガスに遊びに行くのも良いでしょう。お金が集まる場所だけが素晴らしいとは言いませんが、それだけのエンターテインメントは存在します。書物を読むことや実験をすることも大事ですが、時には外的な刺激を求めて、また、痛い目に遭うことも必要だと思います。島国の中で安住しているだけでは、諸外国に置いて行かれてしまいますし、一方で、海外に行くと日本人の良さを改めて実感できる面もあります。

それは、科学技術、科学製品その他色々なことに繋がり、日本の技術が一步先に行く礎を作るものになると思います。

竹内 一郎先生の書籍



(株)新潮社発行



春陽堂書店発行



他者と対面して触れ合う
非言語コミュニケーションが
新たな価値、刺激を生みます